

「個人をどう捉えるか」で変わる教育シーン

～ 北欧の学校・美術館を通して見えてきたもの～

メンバー：小島、内田、守屋

日程：2007年9月11日(火)～20日(木)

目次：

- 1) スウェーデン ウレブロの学校教育現場を訪ねる(内田・守屋)
- 2) フィンランド・スウェーデンの美術館教育の現場を訪ねる(小島)
- 3) フィンランド・ロヴァニエミ サンタクロース村を訪ねる(内田)

テーマ概要

私たちのチームはスウェーデン・フィンランドを訪問した。メンバー3人が同時に動く事はなく、学校と美術館を手分けして視察し、美術館、アートスペースを5箇所、小学校・中学校、障害者学校を各1箇所ずつ訪問。共通したテーマは「個人の捉え方と教育メソッドの構築」である。

スウェーデンは王国であり、強固な教育体系と労働体系で国民の生活の安定を守ってきた。フィンランドは落ち着かない歴史的背景を持ちながらも、教育改革を進め、PISA 2003での高い学力結果で世界中の注目を集めた。

キャラクターの違う両国であるが、教育体系の構築に国家ぐるみで問題意識を持っている事、語学、数学といった学力を支えるものとして、文化・芸術を通じた基礎教育の試みが当たり前に行われていること、は共通している。

教育に強い関心がある内田・守屋と、アートシーンに興味を持つ小島が手分けをして集めた情報を1つのレポートにまとめることで、より深みのある考察が生まれることを目指している。今回は、訪問先で得た情報を時系列に沿ってお伝えし、最後に考察をつけている。

残念ながら今回ご紹介できる情報は、訪問先のほんの一部になる。すべてをご紹介したいのだが、ページの関係で、訪問先からいただいたほんの少しの情報を提供できる形となっていることをご了承願えればと思う。

今回、ご提供できなかった情報に関しては、別の形で皆様にご報告していくつもりである。



1)スウェーデン ウレブロの学校教育現場を訪ねる(内田・守屋)

ウレブロのアドルフスベリ・スコラ(Adolfsbergs-skolan)

ストックホルムから200km、車で3時間ほど走るとウレブロという美しい街がある。700年の歴史をもつ、スウェーデンで7番目に大きな都市だ。人口は12万8,900人。人口の16%が150カ国からやってきた移民だ。意外と知られていないがスウェーデンは世界でもっとも多く移民を受け入れている国(人口900万人中100万人が移民)である。

今回の訪問では、スウェーデンの教育に関する考え方、教えることへの姿勢、そして教え方を学び、閉塞感のある日本の教育現場を活性化するヒントをつかみたいと考えた。

まず、「アドルフスベリ・スコラ」という学校で教育現場を見せていただき、次いで教育行政担当者に問題児対策プロジェクトについてお聞きする予定でウレブロを訪れた。



(校長先生 Karl-Gunnar Pettersson 氏)

学校では校長先生が迎えてくれた。Pettersson さんだ。先生方も子どもたちも親しみを込めて「コーギー」と呼んでいる。「お腹がすいたでしょう。まずは食堂でお昼をどうぞ」と勧められ、子どもたちが食事をする明るく清潔感のある食堂で昼食をいただいた。

おいしかった。レストランのバイキングといった趣きだ。食器がすべて陶器と金属器でプラスチックを使っていないのが気持ちいい。ゆとり教育というのは、陶器のカップでコーヒーを飲むといった日々の小さな豊かさを体感させることなのではないか、と思った。

日本の給食費未納問題の話をするとうスウェーデンはすべて無料なのでピンとこない様子だった。スウェーデンでは保育園から大学院まで教育費はすべて無料だ。大学はお小遣いをもらいながら通える。もちろん学校給食も教科書も無料。医療費も無料。高い税金*を払っても何に使われるかが明確だから不満はないという。「税金を払っているのに子どもの給食費も出ないのはどういうことか」という親たちの不満が給食費未納につながっているのではないかとこの考えに、それも一理あるなと思わされた。

アドルフスベリ・スコラは閑静な住宅街にあった。小学校、中学校、障害児施設が1つになった生徒総数800人の大きな学校だ。障害児施設には周辺の3つの州から21人の生徒が通っている。アドルフスベリ・スコラは生徒の移民比率が低く裕福な家庭の子どもが多いのが特色だ。



* スウェーデンの税金:

【所得税】 地方税 26% ~ 35%

国税(年収 28 万 8600 クローナ以上は国税がかかる)

年収 45 万までは 20%、45 万以上は 25%

【消費税】 25% (食料品、ホテル代、交通費は 12%、書籍、新聞などは 6%)

【その他】 不動産税、贈与税、環境税、法人税...

学校は第2の家庭だ! ~一人ひとりの子どもに居場所がある~

昼食後、施設を隈なく見せていただいた。日本の学校とは、教育に対する価値観とそこからくる施設コンセプトが決定的に違う。教室には必ず複数の小部屋が付属している。教室で授業をした後、子どもの理解度に応じて小グループに分かれて勉強するためだ。落ちこぼれ



をつくらない。劣等感をもたせない。そんな方針が施設に現れている。

少人数に分けて教えると当然人手がかかる。アドルフスベリ・スコーラでは、生徒800人に対し先生が170人いる。1クラス20人。1クラスを7人の先生で担当している。さらに障害児には一人に対して3人の先生が指導にあたる。まさに、一人ひとり

の子どもの可能性を引き出すために、教師が寄ってたかって育てているという感じだ。

少人数で勉強ができるスペースがいたる所に...

日本の学校、特に小学校では、30人、40人の生徒に対して一人の先生がすべて教える。PTAの対応も放課後の部活もすべて担任の先生の仕事だ。学校の外で問題を起こしても、警察から先生の携帯に連絡が入る。

スウェーデンでは、先生の仕事は教えることのみだ。PTAもない。部活もない。学校を離れば、教え子に関して何の責任もない。だから、先生たちは余裕をもって、ひたすら目の前の子どもに注力できるのだ。



アドルフスベリ・スコーラの先生と生徒を見ていると1つの大きな家族のように思えてくる。校長先生はおとうさんだ。行く先々で子どもたちに話しかけ、スキンシップをはかっている。先生はおかあさんやおねえさん、おにいさんのように子どもたちに接している。教師というのは教える人である前に、子どもたちを心から愛する人なのだと感じた。

特に障害児に対しての教育環境には目を見張るものがある。音楽教育、IT教育、アート教育など目的別にさまざまなグループ教育の場があるほかに、一人ひとりの勉強スペースが与えられている。数名が1部屋を使い、それぞれ自分の机がある。また、ダイニングのようなスペースがあり、先生が出してくれるお茶とお菓子を食べながら歓談できる。



(家庭のキッチンとダイニングのような歓談スペース)

自分で決めるタイムスケジュール ～主体的に考え、行動するための教育～

校内を歩いていると授業時間だというのにウロウロしている子ども、歓談スペースで友達と話をしている子どもがいることに気づいた。「あの子どもたちは授業を受けないのですか」と訊ねると「あの子どもたちは今、自由時間なんですよ」との答え。詳しく聞くと小学生も中学生も障害児もすべての子どもが、自分で1日もしくは1週間のタイムスケジュールを立てるのだという。



朝、学校にくるときょう1日の自分のスケジュールを考える。何時にどの授業を受け、何時にお昼を食べ、何時にトイレに行き、何時に自由時間をとるか自分で決める。障害をもった子どももきちんと自分で考える。文字が読めない子は、絵をスケジュール表に貼り付けて1日を自分でデザインする。先生はそれを尊重し、指導していく。

(障害をもった子どものスケジュール表)

自分のことは自分で考え、決める。自分で決めたことは責任をもってやり遂げる。この基本的で重要なことを小学生のときからしっかりと体に刻み込んでいる。日本の教育は、この自分で主体的に決めるという点が弱い。小さい頃から与えられたスケジュール通り、決まっていることをきっちりやることばかりを学んで育つので、いざ自分の方向性を決めようというときには自分がどうしていいかわからなくなる。子どもの頃から主体的に考え、行動する習慣をつけることは日本の教育の大きな課題である。

しかし、主体的に行動させることはそう簡単ではない。すべての子どもがやりなさいということ素直にやるわけではない。特に障害がある子どもの場合、障害を理由にできない、やらないということがままある。そんな子どもを行動させるには、やはり先生の努力が必要だ。

最後に参観させてもらったミュージック・セラピーの授業で先生の子どもの可能性への深い思いとプロとしての努力のすごさを感じた。拝見したのは右手に障害のある子どもとの1:1の



授業だった。先生のピアノに合わせてドラムとシンバルを叩くセッションだ。複数のドラムとシンバルを組み合わせ、さまざまなバリエーションで音楽を生み出していく。とても上手に叩いてセッションは終わった。セッションの間中、言葉はいっさい交わさない。コミュニケーションは先生のピアノと生徒の叩くドラムとシンバルだけだ。

(子どもに合わせて先生が手作りしたスティックの山)

セラピーの初期の頃、この子は障害のある右手をけって使おうとしなかったそうだ。そこで、先生はまずは音楽とは関係のないおもちゃやボールなどで集中させ、少しずつドラムが叩けるようにしていった。子どもの障害やセラピーの進捗に合わせて先生がつくったスティックを見て驚いた。片手でスティックがもてない子のために両手でもてるようにしたスティック、握力がない子のためにすべらないグリップをつけたスティックなど、形状から材質まで膨大な数のスティックがあった。

そこには、ただやりなさいではなく、やれるようにする工夫がある。やれるような工夫をするためには、一人ひとりの子どもと向き合い、一人ひとりの子どものための十分な時間がとれなければならない。

スウェーデンは1990年以降、それまでの教育を見直し、子どもとしっかり向き合う教育へと転換を図った。3歳で保育園にあがった時点から一人ひとりの子どもの履歴が担任の先生により描かれていく。そのプロフィールに沿って伸ばすべき点、補強すべき点が申し送られていく。クラス分けもプロフィールを参考に行われる。

徹底的に個にフォーカスし、一人ひとりの可能性を最大限引き出そうとするスウェーデンの教育から学べることは何か？国としてどのような教育を行うかのしっかりしたビジョンに沿って施設を考え、教師の数、教師の資質を考え、教育体系、コンテンツを考えるべきであるということだ。教育は積み上げでは変わらない。日本の教育をどうするのかの議論が必要だ。

< 資料編 >

実質GDP成長率(95年基準・2006年)

スウェーデン 4.2%

日本 2.2%

名目GDP総額(2006年)

スウェーデン 3,837億9,643万ドル

日本 4兆3,675億ドル

一人あたりGDP(2006年)

スウェーデン 4万2,383ドル

日本 3万4,188ドル

失業率(2006年)

スウェーデン 5.4%(4.6%2007年)

日本 4.1%

対GDP教育費(2005年)

スウェーデン 6.46% 公的教育 6.25% 私的教育 0.21%

日本 4.63% 公的教育 3.47% 私的教育 1.15%

一人あたり教育費(2005年)

スウェーデン 初等教育 6,295ドル 中等教育 6482ドル 高等教育 15,188ドル

日本 初等教育 5,771ドル 中等教育 6534ドル 高等教育 11,164ドル

面積: 日本の1.2倍

人口: 913万人(2007年)

政体: 立憲君主制

防衛費: 約441億クローネ(2005年) 徴兵制

主要産業: 機械工業、化学工業、林業、IT

主な企業: ボルボ、エリクソン

公務員比率: 就業人口の3割

平均寿命: 男性77歳 女性81.9歳

リンク

Adolfsbergs skolan

<http://www2.orebro.se/skolor/adolfsbergsskolan/index.html>

Örebro kommun

<http://www.orebro.se/doldasidor/welcometoorebro.4.37c0d5e810d685ee730800021853.html>

2) フィンランド・スウェーデンの美術館教育の現場を訪ねる(小島)

9月12日 16時半～17時半 フィンランド National Gallery 「Ateneum」
Museum pedagogy 担当 Anja Olavinen さん

9月中旬のフィンランドは、平均気温 13 度前後。薄手のセーターかジャケットは必須である。日中は暖かくても、夕方からの冷え込みは、うっかりすると体調を崩す。



< アテネウム正面 >

国立美術館であるアテネウムは、ヘルシンキ中央駅の目の前、中央広場に面した絶好のロケーションにある。しかし、中央駅広場とはいっても、人は少なく、全体的にもものすごく清々としている。

重厚、壮大な玄関を入ると、いかにも国立美術館という趣の落ち着いた石造りの空間が続く。今回のインタビューはいつもワークショップを行っているアトリエで実施した。

Anja Olavinen さんの主な仕事は、企画展に合わせて子供向けのカリキュラムを開発したり、学校の先生向けの説明会を開催したり、実際にギャラリーツアーのガイドを務めたりすることである。日本の美術館教育の担当者の仕事内容と大きくは変わらない。



< cozy, Anja Olavinen さん,うっち >

しかし、ギャラリーツアーの本数は年間2000本。アテネウムの Museum pedagogy の担当者は全部で3名。どうやって現場を動かしているのか、仕組みには興味がある。

ちなみに、フィンランドの場合は、大学の専攻が職業選択に密接に結びつく特色があるため、3名とも、大学で美術史を専攻している。

アテネウムでは、美術館に来る時間を「娯楽」と捉えており、競合として映画・マンガ・ゲームを視野に入れている。「刺激的な事がたくさんある中で、どうやって美術館に来てもらえるか、

が頭のひねりどころです」と語る姿からは、美術館は決して特別な場所ではなく、子供たちが遊びに行こう！と思った時に自然に選択肢に入る場所なのだ、ということがわかる。

今回は、直近で開催された「Age of the Animal」という企画展と連動して作り上げた子供向けツアープログラムについて伺いました。フィンランドは広大な自然を資産として持っている。農村産業が芸術にどう反映されていくのか、をテーマにした企画展である。

企画展にあわせて、半年前から企画チームが結成される。チームメンバーは、Anja さんを中心に、学校の先生、生物学者、脚本家、そしていつもガイドツアーをしてくれるフリーランスのトーカーたちである。「娯楽」である、という捉え方を象徴するように、今回のプログラムは、5匹の「ウサギ」たちによるガイドツアーとなった。

子供たちが美術館に遊びにくると、いつも違うウサギが登場する。たとえば、田舎ものの素朴なウサギ、都会派の気高いウサギ、おじいちゃんのウサギなどなど。きちんとキャラクター付けされており、トーカーたちは完璧にウサギのキャラクターを演じる。同じ展覧会でも、ウサギのキャラクターが違くと、視点も変わる。何回も来ればいろんなウサギから、いろんな話を聞いて、多角的な視点で物事を考えるきっかけをもらえる。また、展示室内でもコスプレをしたガイドスタッフが待ち受けていて、質問に答えていく。

トーカーの腕にツアーの魅力が左右される。だからこそ、トーカーたちも、企画段階から参加をする。トーカーは全員フリーランスで、美術史専攻、美術大学卒、デザイン工学大卒と経歴はさまざまだが、やはり美術分野の専攻過程を経てきている。現在、契約を結んでいるのは10名で、無料ではなく、仕事としてかかわっている。トーカーとしての人気度も分かれるというから、シビアな人気商売である。いくら、劇調で案内するからといって、劇団員の人は使わない。あくまでも、美術の専門家であり、コミュニケーションのプロであり、教育に意欲的な人しか起用しない、という姿勢がクオリティを生んでいる。

ガイドツアーで、何を落としどころにするのか、と聞いたところ、脚本の中で一応のゴールは決められているが、子供たちにとって「楽しい」時間であったかどうか、が一番重要だという。どんな「楽しさ」を提供していくのか、姿勢と力量が問われる部分であり、Anja さん達 pedagogy 担当者の腕の見せ所となる。

少ない人数ながら、クオリティの高いガイドツアーを実践するキーは、フリーランススタッフの活用と外部プレーンとの提携にあった。

美術館は、娯楽施設の1つとして子供たちには位置づけられている、という視点の中で、存在意義を反映した、高コンテンツを数多く生み出している一例をご紹介した。

参考ホームページ：「Ateneum」 <http://www.ateneum.fi/>

9月14日 10時半～15時半 スウェーデン 「Moderna Musset」
Maria Taube さん他多数

フィンランドからスウェーデンに入ると、土地から発せられる豊かなパワーを全身に感じられる。同じ北欧でありながら、フィンランドの魅力が「朴訥」であれば、スウェーデンの魅力は「豊潤」である。至るところに運河が流れ込み、キラキラと光る水面が更に空気を明るくする。

訪れた「Moderna Musset」はスウェーデン中にある島の1つにあり、岡本太郎の作品に似た原色の力強いモニュメントが点在する公園の上に位置する。

実は、モダーナは金沢21世紀美術館や直島の地中美術館とも親交が深い。

「アートと地域」「アートと子供」「アートと生活」をテーマにしたプログラム開発やコンセプト開発では世界中に刺激を与え続けている存在である。



<モダーナに至る公園>



<モダーナ正面入り口より>

モダーナでは長時間のプログラムを組んで頂き、ほぼ1日かけてあちこちの施設やプログラムを見せてもらえることになった。

その中でも教育プログラムにかかわることにフォーカスして今回はお伝えする。

モダーナのエドゥケーターの特徴は、アーティストが多いということである。

日本では、学芸員は学芸員で、アーティスト(作家)とは明確に分けられている。もちろんディレクターとして企画にかかわる事はあるが、それは日々のエドゥケーターの仕事とは明確に違う。モダーナで働いているエドゥケーターの方の中には、現在もアーティストとして活動している人が多々居るし、アーティストとしてモダーナにかかわったのがエドゥケーターになったきっかけ、という方も居る。

モダーナのエドゥケーションプログラムの基本は「来た個人に合わせる」というもの。つまり、個人個人をしっかりと見て、エドゥケーターとして、その子に何を提供すべきなのかを考えて

創意工夫していかなければならない。

決まったプログラムを運営すれば、それでOKということは無い。ということは創作の技術も、美術の知識も、教育者としてのマインドも併せ持っている人でないと遂行できないということでもある。

スウェーデンは教育者であることのステータスが高いし、本人も誇りを持っている。であるから、アーティストにとってもエドゥケーターというキャリアは魅力に映る。しかも、エドゥケーターになったからといって本人の活動に制限があるわけではない。基本的には、個人名での活動は自由に行いながら、エドゥケーターとしての活動も行っている。

私とファーストコンタクトを取ってくれた Lena Malm 氏は丁度、「コンスタ」というアートスペースでの展示を開始したところだ、とポスターをくれた。Lena 自身、もともとアーティストとしてモダナのエドゥケーションプログラムにかかわった事から今のキャリアがある。

最初から最後までアテンドしてくれた Maria Taube 氏は個人名で絵本を出している。絵本の内容は「死について」「性について」と、なかなか日本では子供に読ませるのにハードルが高い本だが、スウェーデンでは当たり前のこととして子供に見せる内容であり、エドゥケーションプログラムの中で子供たちと実際にコミュニケーションを取る中で内容をブラッシュアップしていったという。個人の活動と、モダナエドゥケーターとしての活動が融合している状態は日本ではなかなか見られないことである。



< 左側が Lena Malm 氏 >



< 右側が Maria Taube 氏と彼女の絵本などの出版物他 >

そんな働き方からも想像できるが、各プログラムはとにかく個人のエドゥケーターの裁量に任される。その雰囲気は、エドゥケーターの集まりというよりも、アーティストの集まりという雰

囲気に近い。端から見ていると、お互いのやり方に影響を受けるとか、ナレッジを共有するという雰囲気よりも、「私のやり方を貫く！」という雰囲気の方が濃厚である。

ただ、個々人の力量は「レポート」「出版物」「コンテンツ開発」といった形で明確にアウトプットにつながっていくので、もちろんプロとしての仕事を実践している。

まさに、この働き方こそプロフェッショナルの働き方といえるかも知れない。

モダーナのプログラムの先進性はエドゥケーター一人一人、個人を大切にした働き方に鍵があるといえるだろう。これは、スウェーデンの教育プログラムが、個人ありきで組まれていることに根っこはつながる。汎用的なプログラムなどそもそも存在せず、100 人生徒が居れば、100通りのカスタマイズが必要となる。だから、先生の数もたくさん必要であるし、先生は生徒一人一人をしっかりと見なくてはならない、ということになる。スウェーデン国内で教育に携わる人全員にこの考え方は当たり前のこととして共有されている。

ここでは、視覚的にもわかりやすい、教育プログラム運営用の教材をいくつかご紹介する。モダーナでは「どんな人が美術館にきても楽しめる」というゴールを果たすために、独自でさまざまなツールを開発している。

たとえば、マティスの絵を立体にしたもの。

マティスの絵は非常に研ぎ澄まされた抽象であり、その線には多くの意味が込められる。何よりも色が美しい。それを違う素材で立体化する。

すると、視覚障害のある子供、集中力が続かない子供などもマティスの世界をじっくりと味わうことができる。立体の高さはすべて異なっており、素材も違うことから、実はじっくりさわると温度が違うことにも気づける。



おなじく、ダリの絵から一部を抜粋して立体化したもの。

男性の足の部分だが、立体化して触らせることで、全体の躍動感やスケールなどを感じさせるツールとして使用している。



今回は、モダーナで聞いた情報のほんの一部しかお伝えできないし、モダーナ以外にも、フィンランドでもスウェーデンでも訪問したところはたくさんあるのだが、それはまたの機会に必ずお伝えしようと思う。

最後に、このモダーナのすばらしい労働環境を整えているディレクター Lars Nittve 氏との夢のツーショットでレポートを締めたいと思う。



<左 cozy 右 Lars Nittve 氏 >

参考ホームページ「modernamusee」<http://www.modernamuseet.se>

3)フィンランド・ロヴァニエミ サンタクローズ村を訪ねる(内田)

ラップランドの郵便局長

フィンランド、ヘルシンキから飛行機で1時間 20 分、ラップランド地方にあるロヴァニエミは、9月というのに気温 5 度の寒さだった。12日(水)朝、北極圏の入り口にあるサンタクローズ村に Santa Claus Greeting Center Ltd.の Risto Huhtala(フッフタラ)さんを訪ねた。

ロヴァニエミにはサンタクローズがいる。正確にはロヴァニエミから 200 km くらいのところにあるコルバ・トゥントゥリ(耳の山)にサンタの秘密の家がある。フィンランドの子どもたちはそう信じている。サンタはその秘密の家から毎日手紙を取りにトナカイでやってくる。

1985 年サンタクローズを信じる世界中の子どもたちに夢を届けるためにロヴァニエミ市がつくったのがサンタクローズ村だ。そのサンタクローズ村で世界中の子どもたちにサンタさんからの手紙を届けているのがフッフタラさんだ。

フィンランドには昔からサンタがいると信じられ、世界中から手紙が届いていた。かつては

政府観光局と郵便局が無料でサンタとして返事を出していたが、切手代をはじめとするコストが大変になったのでやめてしまった。フッフタラさんはそんな郵便局の局長さんだった。

世界のこどもにサンタの夢を！

サンタ村ができたのを機にフッフタラさんは、Santa Claus Greeting Center Ltd を創立し、世界の子どもたちにサンタさんからの手紙を届ける仕事を始めた。スタッフ 3 人の小さな会社だが年間 20 万通の手紙を世界に送っている。150 カ国にサンタクロース・エンバシー(大使館)を置き子どもたちからの手紙を受け付けている。



白い髭をたくわえたサンタクロースやトナカイに乗ってやってくるイメージは、1822 年に書かれた『聖ニコラウスの訪問』という詩に描かれたもの。赤いガウンを着たサンタクロースはコカ・コーラの広告に描かれたものが定着したものだそう。ロヴァニエミのサンタは白い髭をたくわえ赤いガウンを着ていた。

サンタさんは、ラップランド大学の「サンタになるためのコース」で学んでいる。後継者の育成もしっかりしている。

参考ホームページ：<http://www.santagreeting.net/?deptid=9949>